

首都圏・関西の鉄道急カーブ全調査／女の「38度線」越え方

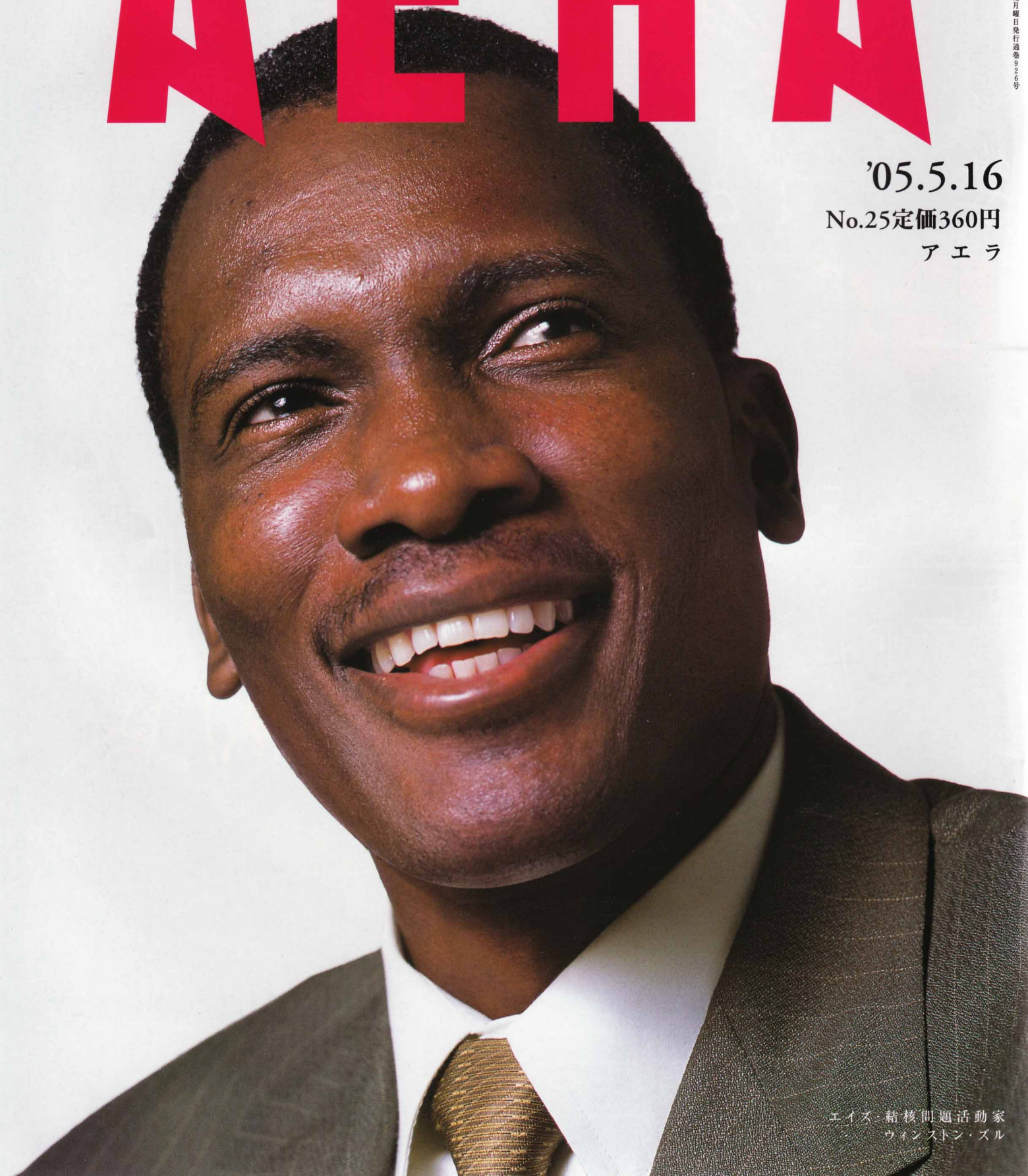
昭和63年6月10日第3種郵便物認可 毎週月曜日発行 通巻926号

AERA

'05.5.16

No.25 定価360円

アエラ



エイズ・結核問題活動家
ウィンストン・ズル



8



13

岩崎一郎

65年東京生まれ。ソニーデザインセンター勤務後、イタリアへ。95年にイワサキデザインスタジオを設立。「機能性をおさえつつ、新しいエッセンスを加えてモダンに仕上げる力が優れている。エスプレッソメーカー⑩は、なめらかな側面の曲線と火が当たる金属部分の合わせ方のバランスが素晴らしい」(桐山)

川崎和男

49年福井県生まれ。伝統工芸品からめがね、コンピューターまで幅広くデザイン。金沢美術工芸大学卒業後に入社した東芝では、高級オーディオブランド「オーレックス」のデザインを担当して大ヒット。28歳の時、交通事故で脊髄を損傷して車いす生活に。経験から「座り心地が良く、カッコいい」車いすや人工心臓をデザインして医学博士も取った。現在は名古屋大学教授。

神原秀夫

78年広島県生まれ。東京造形大学卒業後、東陶機器で、水回り製品のデザインに携わる。28歳の角を持つ消しゴムとしてすっかりおなじみとなった「カドケン」⑪のデザイナー。「何かを補って使いやすくなる、という方法ではなく、そのものの自体を進化させられないかなと考えました」。中高生らの間で人気を呼び、昨年1年間で100万個以上を売るヒット商品に。MoMAのショップでも販売。現在は電通に勤務し、広告表現も手がける。

きりやま・としき／1952年生まれ。デザインプロデューサーを行う「トランク」代表。『ジャパン・アート・ディレクター』のサイトにも運営



10



14

黒川雅之

37年名古屋生まれ。早稲田大学大学院博士課程修了。建築家、プロダクトデザイナーとして活躍。灰皿やベントレー⑫など、富双ゴムと共同で作ったGOMシリーズはMoMAの永久コレクションに。

酒井俊彦

64年高知県生まれ。東京造形大卒業後、コーゾーデザインスタジオに入社。92年独立。「もともと家電に強かったが、そのジャンルにとどまらずに活躍。椅子などのインテリアは、置かれるシーンを強く意識し、使われたときの空間の美しさまでをデザインできる人」(桐山)

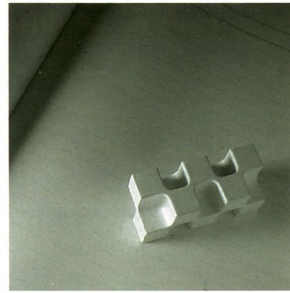
佐藤康三

51年東京生まれ。76年ミラノデザイン工科大卒業。花瓶や時計といったプロダクトデザインから、都市環境、商業施設、博物館などのトータルデザインまで活動の領域は幅広い。富山県高岡市〜新潟市を結ぶ万葉線の真っ赤な路面電車も手がけた。「『もの』はそれを取り巻く関係性の中で美しく存在するということを心がけて仕事をしています」。現在は法政大学・大学院教授も務めている。

素材も、1980年代はプラスチックを使い、いままででない曲げや膨らみなどを使った造形が主流だった。三次元が可能な素材だったからです。

しかし、今年のミラノ・サローネでも、漆器など日本発のものがとても注目された。丹念に緻密にものづくりをしてきた日本の技術やデザイン力が、いま世界での大きな評価につながっています。

世界では、いま日本のデザイン力が非常に注目されている。過剰なほどの装飾性の時代から、物事を暗黙知で語る、引き算の美学がある日本の様式美を再発見し、デザインにも精神性を求めてきているのです。



11



15

富田一彦

65年長崎県生まれ。ミラノを拠点に和テイストを生かした陶器などを制作。南部鉄器の技術と現代デザインを融合させたティンポット⑬は、フランクフルト近代美術館の永久コレクション。「デザインのカットによって軽快感を出し、新しい道具に生まれ変わった」(桐山)

森澤有人

75年東京生まれ。中学卒業後、単身渡米。98年、フィラデルフィア芸術大を卒業、工業デザイナーのカリム・ラシッド氏のデザイン事務所に入社。イッセイミヤケの香水瓶などパッケージデザインに従事。その後、ソニーデザインセンターへ。超薄型パソコン「バイオノート505エクストリーム」などを担当。03年発売の「クリエ」⑭は、PDAを若者や女性が抵抗なく使えるように、ポップなデザインを心がけた。デザインで重視するのは「触れたときの気持ち良さや、部屋に置いたときの存在感」

caro (山口英文)

65年東京生まれ。90年多摩美術大を卒業し富士通に入社。パソコンや携帯電話などのデザイン開発に携わる。98年からデザインスタジオ「caro」を主宰。卓上型のワインクーラー⑮。アルミ鋳造会社社長から依頼し、ラベルが濡れないのができないか、というワインバーの経営者の要望に応えた。今年のミラノ・サローネにも出品。「保冷力などを検証して、今年中に商品化したい」

世界では、いま日本のデザイン力が非常に注目されている。過剰なほどの装飾性の時代から、物事を暗黙知で語る、引き算の美学がある日本の様式美を再発見し、デザインにも精神性を求めてきているのです。



12



16

山崎 宏

70年神戸市生まれ。91年、大阪市立デザイン教育研究所卒業。コクヨを経て05年、ヤマサキデザインワークスを設立。文具やテーブルウェアのデザインを得意とする。最近では、石川県輪島市で漆木地を営む桐本泰一さんと協同し、現代の意匠を生かした漆の食器や文具も手がけた。

山中俊治

57年愛媛県生まれ。82年、東大工学部卒業後、日産自動車デザインセンターを経て87年に独立。カメラ、乗用車などハイテク機器など工業デザインを手がける。JR 東日本Suica 自動改札システムの開発では、磁気カードをタッチしながら改札をスムーズに通るため、タッチ部分に約15度の傾きをつけることを提案。日本語入力キーボード「tagtype」⑯は事務所の若手デザイナーと開発。両手の親指だけで操作できる。

吉岡徳仁

67年佐賀県生まれ。三宅一生氏のもとでデザインを学ぶ。エルメスの展覧会など空間デザインのほか、「kiss me good bye」の椅子などの家具や、スワロフスキーとシャンデリアも制作。「彼は素材の魔術師。アクリルにファイバーを入れたランプは、素材の新しい感情や可能性を引き出している」(桐山)

日本のデザインは、いままでチームワークで、企業のブランド力を支える縁の下での力持ちとして存在していた。大手企業が数多くのデザイナーを抱える世界でも珍しい国。多くの技術力が集積される工業製品が主流だったから、チームワークの総合力で勝負していた。しかし中国などの台頭で、価格競争では勝てず、技術力や研究開発力だけでは、大きな差が出にくい時代になっている。企業は、洗練され、しかも今までの価値観を壊すようなデザインを熱心に欲している。フリーのデザイナーと手を組むようになってきている。